

森  
鷗  
外

山  
椒  
大  
夫





山  
椒  
大  
夫



越後えちごの春日かすがを経て今津いまづへ出る道を、珍らしい旅人の  
一群ひとむれが歩いている。母は三十歳を踰こえたばかりの女で、  
二人の子供を連れている。姉は十四、弟は十二である。  
それに四十位の女中が一人附いて、草臥くたびれた同胞はらから二人を、  
「もうじきにお宿つぎにお著つぎなさいます」と云って励まして  
歩かせようとする。二人の中で、姉嬢は足を引き摩ずるよ  
うにして歩いているが、それでも気が勝っていて、疲れ  
たのを母や弟に知らせまいとして、折々思い出したよう

に弾力のある歩あるきつき附をして見せる。近い道を物詣ものまいりにでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群であるが、笠かさやら杖つえやら甲斐かい々々しい出立いでたちをしているのが、誰の目にも珍らしく、又気の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の断たえたり続いたりする間を通っている。砂や小石は多いが、秋日あきびより和なごに好く乾いて、しかも粘土とんが雑まじっているために、好く固まっこっていて、海の傍そばのように踝くるぶしを埋うづめて人を悩なやますことはない。

藁わら葺ぶきの家が何軒も立ち並んだ一構ひとかまえが柞ははその林に囲まれて、それに夕日がかつと差している処ところに通とり掛かかった。

「まああの美しい紅葉もみじを御覧」と、先に立っていた母が指さして子供に言った。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも云わぬので、女中が云った。「木の葉があんなに染まるのでございませぬから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませぬね」

姉娘が突然弟を顧みて云った。「早くお父う様のいらっしやる処へ往ゆきたいわね」

「姉ねえさん。まだなかなか往いかれはしないよ」弟は賢さかしげに答えた。

母が諭さとすように云った。「そうですね。今まで越して来たような山を沢山越して、河や海をお船たびたびで度々渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出して大人おとなしく歩かなくては」

「でも早く往きたいのですもの」と、姉娘は云った。

一群は暫しばらく黙もくって歩いた。

向うから空桶からおけを担かついで来る女がある。塩浜から帰る潮しお汲女くみおんなである。

それに女中が声を掛けた。「申し申し。この辺に旅の人の宿をする家はありませんか」



潮汲女は足を駐<sup>と</sup>めて、主従四人の群<sup>むれ</sup>を見渡した。そしてこう云った。「まあ、お気の毒な。生憎<sup>あいにく</sup>な所で日が暮れますね。この土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありません」

女中が云った。「それは本当ですか。どうしてそんなに人<sup>じん</sup>氣<sup>き</sup>が悪いのでしょう」

二人の子供は、はずんで来る対話の調子を気にして、潮汲女の傍<sup>そば</sup>へ寄ったので、女中と三人で女を取り巻いた形になった。

潮汲女は云った。「いいえ。信者が多くて人<sup>じん</sup>氣<sup>き</sup>の好<sup>い</sup>

土地ですが、くにのかみ国守のおきて掟だからしかた為方がありません。もうあそこに」と言いさして、女は今来た道を指さした。「もうあそこに見えています。あの橋までお出でなさると、たかふだ高札が立っています。それにくわ精しく書いてあるそうです。が、近頃悪い人買がこの辺を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはおとがめ咎があります。あたり七軒巻添になるそうです」

「それは困りますね。子供衆もお出いでなさるし、もうそう遠くまでは行かれませぬ。どうかしやう為様はありますまいか」

「そうですね。わたしの通う塩浜のあるあたりまで、あなた方がお出いでなさると、夜になってしまひましょう。どうもそこらで好い所を見附けて、野宿をなさるより外、為方がありますまい。わたしの思案では、あそこの橋の下にお休なさるが好いでしょう。岸の石垣いしがきにぴったり寄せて、河原に大きい材木が沢山立ててあります。荒川の上かみから流して来た材木です。昼間はその下で子供が遊んでいますますが、奥の方には日も差さず、暗くなっている所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはこうして毎日通う塩浜の持主の所にいます。ついそこの柵ははその

森の中です。夜になったら、藁わらや薦こもを持って往ってあげ  
ましょう」

子供等の母は一人離れて立って、この話を聞いていた  
が、この時潮汲女の傍に進み寄って云った。「好い方に  
出逢であいましたのは、わたし共しあわの為合せでございませう。そ  
こへ往って休ませよう。どうぞ藁や薦をお借申しとう  
ございませう。せめて子供達にでも敷かせたり被きせたりい  
たしとうございませう」

潮汲女は受け合って、柞の林の方へ帰って行く。主従  
四人は橋のある方へ急いだ。

荒川に掛け渡したおうげのはし応化橋のたもと袂に一群は来た。潮汲女の云った通に、新しい高札が立っている。書いてある国守の掟も、女のことば詞にたが違わない。

人買が立ち廻るなら、その人買のせんぎ詮議をしたら好きそうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷わせるような掟を、国守はなぜ定めたものか。ふつつか不束な世話の焼きようである。しかし昔の

人の目には掟はどこまでも掟である。子供等の母は只ただそ  
う云う掟のある土地に合せた運命を歎くだけで、掟の  
善よし悪あしは思わない。

橋の袂に、河原へ洗濯せんたくに降りるものの通う道がある。  
そこから一群は河原に降りた。なる程大層な材木が石垣  
に立て掛けてある。一群は石垣に沿うて材木の下へ潜くぐっ  
て這はい入った。男の子は面白がって、先に立って勇んで這  
入った。

奥深く潜もぐって這入ると、洞穴ほらあなのようになつた所がある。  
下には大きい材木が横になつていたので、床とこを張つたよ

うである。

男の子が先に立って、横になつてゐる材木の上に乗つて、一番隅すみへ這入つて、「姉えさん、早くお出いでなさい」と呼ぶ。

姉娘はおそるおそる弟の傍へ往つた。

「まあ、お待遊ばせ」と女中が云つて、背に負つていた包を卸した。そして着換の衣類を出して、子供を脇わきへ寄らせて、隅の処に敷いた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、二人の子供が左右からすが縋り附いた。岩代いわしろの信夫郡しのぶごおりの住家すみかを出て、親子はここまで来るうちに、

家の中ではあっても、この材木の蔭より外らしい所に寝たことがある。不自由にも次第に慣れて、もうさ程苦にはしない。

女中の包から出したのは衣類ばかりではない。用心に持っている食物もある。女中はそれを親子の前に出して置いて云った。「ここでは焚火たきびをいたすことは出来ません。若もし悪い人に見附けられてはならぬからでございませす。あの塩浜の持主とやらの家まで往って、お湯を貰もらつてまいりましょう。そして藁や薦の事も頼んでまいりましょう」



女中はまめまめしく出て行った。子供は楽しげにおこしごめ啼  
 やら、乾した果くだものやらを食べはじめた。

暫くすると、この材木の蔭へ人の這入って来る足音が  
 した。「姥竹うばたけかい」と母親が声を掛けた。しかし心の内  
 には、柞の森まで往って来たにしては、余り早いと疑っ  
 た。姥竹と云うのは女中の名である。

這入って来たのは四十歳ばかりの男である。骨組たくまの逞  
 しい、筋肉が一つびとつ肌の上から数えられる程、脂肪  
 の少い人で、牙彫げぼりの人形のような顔に笑えみを湛たたえて、手に  
 数珠を持っている。我家を歩くような、慣れた歩附をし

て、親子の潜んでいる処へ進み寄った。そして親子の座席にしている材木の端に腰を掛けた。

親子は只驚いて見ている。仇あをたしそうな様子も見えぬので、恐ろしいとも思わぬのである。

男はこんな事を言う。「わしは山岡大夫と云う船乗じや。この頃この土地を人買が立ち廻ると云うので、国守こくしゅが旅人に宿を貸すことを差し止めた。人買を掴つかまえることは、国守の手に合わぬと見える。気の毒なは旅人じゃ。そこでわしは旅人を救うて遣やらうと思ひ立った。さいわいわしが家は街道を離れているので、こっそり人を留め

ても、誰たれに遠慮もいらぬ。わしは人の野宿をしそうな森の中や橋の下を尋ね廻って、これまで大勢の人を連れて帰った。見れば子供衆が菓子を食べていなさるが、そんな物は腹の足しにはならないで、齒さわに障る。わしが所ではさしたる饗応もてなしはせぬが、芋粥いもがゆでも進ぜましょう。どうぞ遠慮せずに来て下されい」男は強しいて誘うでもなく、独語ひとりごとのように言ったのである。

子供の母はつくづく聞いていたが、世間の掟そむに背いてまでも人を救おうと云う難有ありがたい志に感ぜずにはいられなかつた。そこでこう云った。「承われれば殊勝なお心掛と

存じます。貸すなど云う掟のある宿を借りて、ひよつと  
宿主やどぬしに難儀を掛けようかと、それが気掛かりでございま  
すが、わたくしはともかくも、子供等に温ぬくいお粥かゆでも食  
べさせて、屋根の下に休ませることが出来ましたら、そ  
の御恩は後の世までも忘れますまい」

山岡大夫は頷うなずいた。「さてさて好う物のわかる御婦  
人じゃ。そんならすぐに案内をして進ぜましょう」こう  
云って立ちそうにした。

母親は気の毒そうに云った。「どうぞ少しお待下さい  
ませ。わたくし共三人がお世話になるさえ心苦しゅうご

ざいますのに、こんな事を申すのはいかがと存じますが、  
 実は今一人連つれがございます」

山岡大夫は耳をそぼだ欷そぼだてた。「連つれがおりなさる。それは男おなごか女子おなごか」

「子供達の世話をさせに連れて出た女中でございます。  
 湯を貰うと申して、街道を三四町跡へ引き返してまいりました。もう程なく帰ってまいりましょう」

「お女中かな。そんなら待つて進ぜましょう」山岡大  
 夫の落ち著ついた、底の知れぬような顔に、なぜか喜よろこびの  
 影が見えた。

ここは直江の浦である。日はまだ米山の背後うしろに隠れていて、紺青こんじょうのような海の上には薄い靄もやが掛かっている。

一群の客を舟に載せて、纜ともづなを解いている船頭がある。

船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家に泊った主従四人の旅人である。

応化橋おうげのはしの下で山岡大夫に出逢った母親と子供二人とは、女中姥竹うばたけが欠け損じた瓶子へいしに湯を貰って帰るのを待

ち受けて、大夫に連れられて宿を借りに往った。姥竹は不安らしい顔をしながら附いて行つた。大夫は街道を南へ這入った松林の中の草の家に四人を留めて、芋粥を進めた。そしてどこからどこへ往く旅かと問うた。草臥くたびれた子供等を先へ寝させて、母は宿の主人あるじに身の上のおおよそを、微かすかな燈火ともしびの下もとで話した。

自分は岩代いわしろのものである。夫が筑紫ちくしへ往つて歸らぬので、二人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉娘の生れた時から守もりをしてくれた女中で、身寄のないものゆえ、遠い、覚束おぼつかない旅の伴ともをすることになったと話したので

ある。

さてここまでは来たが、筑紫の果へ往くことを思えば、まだ家を出たばかりと云つても好い。これから陸おかを行つたものであるうか。又は船路ふなじを行つたものであるうか。主人はあるじ船乗であつて見れば、定めて遠国の事を知つているだらう。どうぞ教えて貰いたいと、子供等の母が頼んだ。

大夫は知れ切つた事を問われたように、少しもためらわずに船路を行くことを勧めた。陸を行けば、じき隣の越中の国に入る界さかいにさえ、親不知子不知おやしらずこしらずの難所なんじよがある。



削り立てたような巖石の裾すそには荒浪あらのなみが打ち寄せせる。旅人は横穴に這入って、波の引くのを待っていて、狭い巖石の下の道を走り抜ける。その時は親は子を顧みることが出来ず、子も親を顧みることが出来ない。それは海辺の難所である。又山を越えると、踏まえた石が一つ揺ゆるげば、千尋ちひろの谷底に落ちるような、あぶない岨道そわみちもある。西国さいこくへ往くまでには、どれ程の難所があるか知れない。それとは違って、船路は安全なものである。慥たしかな船頭にさえ頼めば、いながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西国まで往くことは出来ぬが、諸国の船頭を知つ

ているから、船に載せて出て、西国へ往く舟に乗り換えさせることが出来る。あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事もなげに云った。

夜が明け掛かると、大夫は主従四人をせき立てて家を出た。その時子供等の母は小さいふくろ囊から金を出して、宿賃を払おうとした。大夫は留めて、宿賃は貰わぬ、しかし金の入れてある大切な囊は預って置こうと云った。なんでも大切な品は、宿に著けば宿の主人あるじに、舟に乗れば舟の主ぬしに預けるものだと言うのである。

子供等の母は最初に宿を借かることを許してから、主人

の大夫の言う事を聴きかなくてはならぬような勢いきおいになつた。掟を破つてまで宿を貸してくれたのを、難有くは思つても、何事によらず言うがままになる程、大夫を信じてはいない。こう云う勢になつたのは、大夫の詞に人を押し附ける強みがあつて、母親はそれに抗あらがうことが出来ぬからである。その抗うことの出来ぬのは、どこか恐ろしい処があるからである。しかし母親は自分が大夫を恐れているとは思っていない。自分の心がはっきりわかつていない。

母親は余儀ない事をするような心持で舟に乗つた。子

供等は屈ないだ海の、青い氈かもを敷いたような面おもてを見て、物珍しさに胸を跳おどらせて乗った。只姥竹が顔には、きのう橋の下を立ち去った時から、今舟に乗る時まで、不安の色が消え失せなかつた。

山岡大夫は纜ともづなを解さいた。勸さおで岸を一押押すと、舟は揺ゆらめきつつ浮び出た。

山岡大夫は暫く岸に沿うて南へ、越えつちゆうざかい中境なかまがの方角へ漕こ

いで行く。靄は見る見る消えて、波が日に赫かがやく。

人家のない岩蔭に、波が砂を洗って、海松みるや荒布あらめを打ち上げて、いる処があつた。そこに舟が二艘そう止まっている。船頭が大夫を見て呼び掛けた。

「どうじゃ。あるか」

大夫は右の手を挙げて、大拇おやゆびを折って見せた。そして自分もそこへ舟もやを舫もやつた。大拇おやゆびだけ折つたのは、四人あると云う相図である。

前からいた船頭の一人は宮崎みやざきの三郎と云って、越中宮崎みやざきのものである。左の手の拳こぶしを開いて見せた。右の手

が貨しろものの相図になるように、左の手は銭の相図になる。これは五貫文に附けたのである。

「気張るぞ」と今一人の船頭が云って、左の臂ひじをつと伸べて、一度拳を開いて見せ、次いで示ひとさしゆび指を豎たてて見せた。この男は佐渡さどの二郎で六貫文に附けたのである。

「横着者奴おうちやくものめ」と宮崎が叫んで立ち掛かれば、「出し抜こうとしたのはおぬしじや」と佐渡が身構をする。二艘の舟がかしいで、舷ふなばたが水を答むちうった。

大夫は二人の船頭の顔を冷かに見較べた。「慌あわてるな。どっちも空手からてでは還かえさぬ。お客様が御窮屈でないように、

お二人ずつ分けて進ぜる。賃銭は跡で附けた値段の割じや」こう云って置いて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人ずつあの舟へお乗なされ。どれも西国への便船じや。舟足と云うものは、重過ぎては走りが悪い」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手を執とって乗り移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾いくさし緡かの銭を握ふくろらせたのである。

「あの、主人あるじにお預けなされた囊ふくろは」と、姥竹しゅうが主の袖を引く時、山岡大夫は空舟をつと押し出した。

「わしはこれでお暇いとまをする。慥たしかな手から慥かな手へ

渡すまでがわしの役じや。

御機嫌好うお越しなされ」

廨ろの音が忙せわしく響いて、山岡大夫の舟は見る見る遠ざかって行く。

母親は佐渡に言った。「同じ道を漕いで行って、同じ港に著くのでございましょうね」

佐渡と宮崎とは顔を見合せて、声を立てて笑った。そして佐渡が云った。「乗る舟は弘誓くぜいの舟、著くは同じ彼岸かのきしと、蓮華峰寺れんげぶじの和尚おしょうが云うたげな」

二人の船頭はそれきり黙って舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」と呼



びかわす親子主従は、只遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂おしげに舷に手を掛けて伸び上がった。「もう為方がない。これが別わかだよ。安寿あんじゆは守まもり本尊ほんぞんの地蔵様を大切にずしおうおし。厨子王ずしおうはお父様の下さった護まもり刀がたなを大切にずしおうおし。どうぞ二人が離れぬように」安寿は姉娘、厨子王は弟の名である。

子供は只「お母あ様、お母あ様」と呼ぶばかりである。舟と舟とは次第に遠ざかる。後うしろには餌えを待つ雛ひなのよあうに、二人の子供が開いた口が見えていて、もう声は聞えない。

姥竹は佐渡の二郎に「申し船頭さん、申し申し」と声を掛けていたが、佐渡は構わぬので、とうとう赤松の幹のような脚に縫すがった。「船頭さん。これはどうした事でございます。あのお嬢様、若様に別れて、生きてどこへ往かれましょう。奥様も同じ事でございます。これから何をたよりにお暮らしなさいましょう。どうぞあの舟の往く方へ漕いで行つて下さいまし。後生ごしようでございます」

「うるさい」と佐渡は後様うしろさまに蹴けった。姥竹は舟ふなに倒れた。髪は乱れて舷に掛かった。

姥竹は身を起した。「ええ。これまでじゃ。奥様、御

免下さいまし」こう云つて真まつ逆さか様に海に飛び込んだ。

「こら」と云つて船頭は臂を差し伸ばしたが、間に合わなかつた。

母親は袿うちきを脱いで佐渡が前へ出した。「これは粗末な物でございしますが、お世話になつたお礼に差し上げます。わたくしはもうこれでお暇を申します」こう云つて舷に手を掛けた。

「たわけが」と、佐渡は髪を掴んで引き倒した。「うぬまで死なせてなるものか。大事な貨しろものじゃ」

佐渡の二郎は牽つな器を引き出して、母親をくるくる巻に

して転ころがした。そして北へ北へと漕いで行った。

「お母あ様お母あ様」と呼び続けている姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走って行く。

「もう呼ぶな」と宮崎が叱った。「水の底の鱗いろくず介には聞えても、あの女子おなごには聞えぬ。女子共は佐渡へ渡って粟あわの鳥でも逐おわせられることじやろう」

姉の安寿と弟の厨子王とは抱き合って泣いている。故

郷を離れるも、遠い旅をするも母と一しよにすることだ  
 と思つていたのに、今料<sup>はか</sup>らずも引き分けられて、二人は  
 どうして好いかわからない。只悲しさばかりが胸に溢<sup>あふ</sup>れ  
 て、この別が自分達の身の上をどれだけ変らせるか、そ  
 の程<sup>ひる</sup>さえ弁<sup>わきま</sup>えられぬのである。

午<sup>ひる</sup>になつて宮崎は餅<sup>もち</sup>を出して食つた。そして安寿と厨  
 子王にも一つずつくれた。二人は餅を手<sup>て</sup>に持つて食べ  
 ようともせず、目を見合せて泣いた。夜は宮崎が被<sup>かぶ</sup>せた苦<sup>とま</sup>  
 の下で、泣きながら寐<sup>ね</sup>入<sup>い</sup>つた。

こうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。宮崎は越

中、能登<sup>の</sup>、越前<sup>えちぜん</sup>、若狭<sup>わかさ</sup>の津々浦々を売り歩いたのである。

しかし二人が穉<sup>おさな</sup>いのに、体もか弱く見えるので、なかなか買おうと云うものがない。たまに買手があつても、値段の相談が調<sup>ととの</sup>わない。宮崎は次第に機嫌を損じて、「いつまでも泣くか」と二人を打つようになった。

宮崎が舟は廻り廻つて、丹後の由良<sup>ゆら</sup>の港に来た。ここには石浦<sup>いしうら</sup>と云う処に大きい邸<sup>やしき</sup>を構えて、田畑<sup>すなどり</sup>に米麦<sup>こめむぎ</sup>を植えさせ、山では猟<sup>かり</sup>をさせ、海では漁<sup>すなどり</sup>をさせ、蚕飼<sup>こがい</sup>をさせ、機織<sup>はたおり</sup>をさせ、金物、陶物<sup>すえもの</sup>、木の器、何から何まで、それぞれ職人を使って造らせる山椒<sup>さんしょう</sup>大夫と云う

分限者ぶげんしやがいて、人なら幾らでも買う。宮崎はこれまでも、余所よそに買手のない貨しろものがあると、山椒大夫が所へ持つて来ることになつていた。

港に出張つていた大夫の奴やつこがしらは、安寿、厨子王をすぐに七貫文に買った。

「やれやれ、餓鬼共がきどもを片付けて身が軽うなつた」と云つて、宮崎の三郎は受け取つた錢を懐ふところに入れた。そして波止場の酒店さけみせに這入つた。

一抱ひとかかえに余る柱を立て並べて造った大厦おおいえの奥深い広間  
 に一間四方の炉を切らせて、炭火がおこしてある。その  
 向むこうに茵しとねを三枚かさ重ねて敷いて、山椒大夫はおしまずき几こまにた靠れ  
 ている。左右には二郎、三郎の二人の息子が狛犬こまいぬのよう  
 に列ならんでいる。もと大夫には三人の男子があつたが、太  
 郎は十六歳の時、逃亡を企てて捕えられた奴やつこに、父が  
 手ずから烙印やきいんをするのをじつと見ていて、一言ごんも物を言  
 わずに、ふいと家を出て行方ゆくえが知れなくなつた。今から  
 十九年前の事である。



奴頭が安寿、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の  
子供に辞儀をせいと云った。

二人の子供は奴頭の詞が耳に入らぬらしく、只目を漣  
って大夫を見ている。今年六十歳になる大夫の、朱を塗  
ったような顔は、額が広く崑が張って、髪も鬚も銀色に  
光っている。子供等は恐ろしいよりは不思議がって、じ  
っとその顔を見ているのである。

大夫は云った。「買うて来た子供はそれか。いつも買  
う奴と違うて、何に使うて好いかわからぬ、珍らしい  
子供じゃと云うから、わざわざ連れて来させて見れば、

色の蒼あおざめた、か細い童わらわども共じや。何に使うて好いかは、わしにもわからぬ」

傍から三郎が口を出した。末の弟ではあるが、もう三十になつてゐる。「いやお父とっさん。さつきから見れば、辞儀をせいと云われても辞儀もせぬ。外の奴のよなのりうに名告もせぬ。弱々しゆう見えてもしぶとい者共じや。奉公初はじめは男が柴しば刈かり、女が汐しお汲くみと極きまつてゐる。その通にさせなされい」

「仰おっしやるとおり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭が云つた。

大夫は嘲笑あざわらった。「愚者おろかもと見える。名はわしが附けて遣る。姉はいたつきを垣衣しのぶぐさ、弟は我名わすれぐさを萱草わすれぐさじゃ。垣衣は浜へ往って、日に三荷がの潮を汲め。萱草は山へ往って日に三荷の柴を刈れ。弱々しい体に免じて、荷は軽うして取らせる」

三郎が云った。「過分のいたわり様じゃ。こりや、奴頭。早く連れて下がって道具を渡して遣れ」

奴頭は二人の子供を新参小屋に連れて往って、安寿には桶おけと杓ひやう、厨子王かまには籠かごと鎌かまを渡した。どちらにも午餉ひるげを入れる汀子かれいけが添えてある。新参小屋は外ほかの奴婢ぬひの居所

とは別になっているのである。

奴頭が出て行く頃には、もうあたりが暗くなった。この屋いえには燈火あかりもない。

---

翌日の朝はひどく寒かった。ゆうべは小屋に備えてある衾ふすまが余りきたないので、厨子王が薦こもを探して来て、舟で苦とまをかずいたように、二人でかずいて寝たのである。きのう奴頭に教えられたように、厨子王は汀子かれいけを持つ

て厨くりやへ餉かれいを受け取りに往った。屋根の上、地にちらばった藁わらの上には霜が降っている。厨は大きい土間で、もう大勢の奴婢が来て待っている。男と女とは受け取る場所が違うのに、厨子王は姉のと自分のと貰おうとするので、一度は叱られたが、あすからは銘々が貰いに来ると誓って、ようよう汀子の外に、面桶めんつうに入れた蒔かたかゆと、木の椀まりに入れた湯との二人前ふたりまえをも受け取った。蒔は塩を入れて炊かしいである。

姉と弟とは朝餉あさげを食べながら、もうこうした身の上になつては、運命もとの下に項うなじを屈かがめるより外はないと、け

なげにも相談した。そして姉は浜辺へ、弟は山路やまじをさして行くのである。大夫が邸の三の木戸、二の木戸、一の木戸を一しよに出て、二人は霜を履ふんで、見返り勝がちに左右へ別れた。

厨子王が登る山は由良ゆらが嶽たけの裾で、石浦からは少し南へ行つて登るのである。柴を苴あらわる所は、麓ふもとから遠くはない。所々紫色の岩の露あらわれている所を通つて、稍やや広い平地に出る。そこに雑木が茂っているのである。

厨子王は雑木林の中に立ってあたりを見廻した。しかし柴はどうして苴あらわるものかと、暫くは手を著け兼ねて、

朝日に霜の融け掛かる、茵しとねのような落葉の上に、ぼんやりすわって時を過した。ようよう気を取り直して、一枝二枝苜るうちに、厨子王は指を傷めたいた。そこで又落葉の上にすわって、山でさえこんなに寒い、浜辺に往った姉様は、さぞ潮風が寒かろうと、ひとり涙をこぼしていた。

日が余程昇ってから、柴を背負って麓へ降りる、外の樵きこり通り掛かって、「お前も大夫の所の奴か、柴は日に何苜かるのか」と問うた。

「日に三苜はずる筈の柴を、まだ少しも苜りませぬ」と厨

子王は正直に云った。

「日に三荷の柴ならば、午までに二荷茹るが好い。柴はこうして茹るものじゃ」樵は我荷を卸して置いて、すぐに一荷茹ってくれた。

厨子王は気を取り直して、ようよう午までに一荷茹り、午から又一荷茹った。

浜辺に往く姉の安寿は、川の岸を北へ行つた。さて潮を汲む場所に降り立ったが、これも汐の汲みようを知らない。心で心を励まして、ようよう杓ひくいを卸すや否や、波が杓を取って行つた。



隣で汲んでいる女子が、手早く杓を拾って戻した。そしてこう云った。「汐はそれでは汲まれません。どれ汲みようを教えてください。右手の杓でこう汲んで、左手の桶でこう受ける」とうとう一荷汲んでくれた。

「難有うございます。汲みようが、あなたのお蔭で、わかったようでございます。自分で少し汲んで見ましよう」安寿は汐を汲み覚えた。

隣で汲んでいる女子に、無邪気な安寿が気に入った。二人は午餉を食べながら、身の上を打ち明けて、姉妹の誓をした。これは伊勢の小菘と云って、二見が浦から

買われて来た女子である。

最初の日はこんな工合に、姉が言い附けられた三荷の潮も、弟が言い附けられた三荷の柴も、一荷ずつの勧進かんじんを受けて、日の暮までに首尾好く調った。

---

姉は潮を汲み、弟は柴を茹ひつて、一日一日と暮ひとひひとひらして行いった。姉は浜で弟を思い、弟は山で姉を思い、日の暮を待まちって小屋に帰れば、二人は手を取り合あって、筑紫に

いる父が恋しい、佐渡にいる母が恋しいと、言つては泣き、泣いては言う。

とかくするうちに十日立つた。そして新参小屋を明けなくてはならぬ時が来た。小屋を明けければ、やつこ奴は奴、はしため婢は婢の組に入るのである。

二人は死んでも別れぬと云つた。奴頭が大夫に訴えた。大夫は云つた。「たわけた話じゃ。奴は奴の組へ引き摩ずつて往け。婢は婢の組へ引き摩つて往け」  
 奴頭が承つて起たとうとした時、二郎がかたわら傍から呼び止めた。そして父に言つた。「仰やる通に童わらべども共を引き分

けさせても宜よろしゆうございますが、童共は死んでも別れぬと申すそうでございます。愚なものゆえ、死ぬるかも知れません。苳る柴はわずかでも、汲む潮はいささかでも、人手を耗へらすのは損でございます。わたくしが好いように計らって遣りましょう」

「それもそうか。損になる事はわしも嫌きらじや。どうにでも勝手にして置け」大夫はこう云つて脇へ向いた。

二郎は三の木戸に小屋を掛けさせて、姉と弟とを一しよに置いた。

或日の暮に二人の子供は、いつものように父ふ母ぼの事を

言っていた。それを二郎が通り掛かって聞いた。二郎は邸を見廻つて、強い奴が弱い奴を虐げたり、いさかい 諍いさかいをしたり、盗ぬすみをしたりするのを取り締まっているのである。

二郎は小屋に這入つて二人に言った。「父母は恋しゅうても佐渡は遠い。筑紫はそれより又遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢いたいなら、大きゅうなる日を待つが好い」こう云つて出て行つた。

程経て又或日の暮に、二人の子供は父母の事を言っていた。それを今度は三郎が通り掛かつて聞いた。三郎は寝鳥を取ることが好すきで邸の内の木立々々を、手に弓矢を

持って見廻るのである。

二人は父母の事を言う度に、たびどうしようか、あまりこうしようかと、逢いたさの余に、あらゆる手立を話し合って、夢のような相談をもする。きようは姉がこう云った。「大きくなってからでなくては、遠い旅が出来ないと云うのは、それは当り前の事よ。わたし達はその出来ない事がしたいのだわ。だがわたし好く思つて見ると、どうしても二人一しよにここを逃げ出しては駄目なの。わたしには構わないで、お前一人で逃げなくては。そして先へ筑紫の方へ往つて、お父う様にお目めに掛かつて、どうした

ら好いか何うのだね。それから佐渡へお母様のお迎に往くが好いわ」三郎が立聞をしたのは、生憎あいにくこの安寿の詞ことばであつた。

三郎は弓矢を持って、つと小屋の内に這入つた。「こら。お主達ぬしたちは逃げる談合くわだてをしておるな。逃亡の企くわだてをしたものには烙印やきいんをする。それがこの邸の掟じや。赤うなつた鉄は熱いぞよ」

二人の子供は真まっ蒼さおになつた。安寿は三郎が前に進み出て云つた。「あれは淌うそでございます。弟が一人で逃げたつて、まあ、どこまで往かれましよう。余り親に逢い

たいので、あんな事を申しました。こないだも弟と一しよに、鳥になって飛んで往こうと申したこともございませす。出放題でございませす」

厨子王は云った。「姉えさんの云う通りです。いつでも二人で今のような、出来ない事ばかり言つて、父母ちちははの恋しいのを紛らしているのです」

三郎は二人の顔を見較べて、暫くの間黙つていた。「ふん。洵なら洵でも好い。お主達が一しよにおつて、なんの話をするとうことを、己おれが慥たしかに聞いて置いたぞ」  
こう云つて三郎は出て行つた。



その晩は二人が気味悪く思いながら寐た。それからど  
れだけ寐たかわからない。二人はふと物音を聞き附けて  
目を醒さました。今の小屋に来てからは、燈火ともしびを置くこと  
が許かされている。その微かすかな明りで見れば、枕まくらもと元もとに三  
郎が立っている。三郎は、つと寄つて、両手で二人の手  
を掴つかまえる。そして引き立てて戸口を出る。蒼ざめた月  
を仰ぎながら、二人は目見えの時に通つた、広い馬道めどうを  
引かれて行く。階はしを二段登る。廊ほそどのを通る。廻めぐり廻めぐつて前さき  
の日に見た見た広間に這入る。そこには大勢の人が黙つて並  
んでいる。三郎は二人を炭火の真つ赤におこつた炉の前

まで引き摩つて出る。二人は小屋で引き立てられた時から、只「御免なさい御免なさい」と云っていたが、三郎は黙って引き摩つて行くので、しまいには二人も黙ってしまった。炉の向側には茵むかいがわ三枚を畳ねて敷いて、山椒大夫がすわっている。大夫の赤顔が、座の右左に焚たいてある炬たてあかし火を照り反かえして、燃えるようである。三郎は炭火の中から、赤く焼けている火勸ひぼしを抜き出す。それを手に持って、暫く見ている。初め透き通るように赤くなっていた鉄が、次第に黒ずんで来る。そこで三郎は安寿を引き寄せて、火勸ひぼしを顔に当てようとする。厨子王はその肘ひじ

に絡からみ附く。三郎はそれを蹴倒けたおして右の膝ひざに敷く。とうとう火勸を安寿の額に十文字に当てる。安寿の悲鳴が一座の沈黙を破って響き渡る。三郎は安寿を衝つき放して、膝の下の厨子王を引き起し、その額にも火勸を十文字に当てる。新あらたに響く厨子王の泣声なみごゑが、稍やや微かになつた姉の声に交る。三郎は火勸を棄てて、初め二人をこの広間へ連れて来た時のように、又二人の手を掴まえる。そして一座を見渡した後、広い母屋おもやを廻めぐつて、二人を三段の階はしの所まで引き出し、凍った土の上に衝き落す。二人の子供は創きずの痛いたみと心こゝろの恐おそれれとに氣を失いそうになるのを、よ

うよう堪え忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家こやに帰る。臥所ふしどの上に倒れた二人は、暫く死骸しがいのように動かずにいたが、忽たちまち厨子王が「姉えさん、早くお地藏様を」と叫んだ。安寿はすぐに起き直って、肌の守まもり袋ぶくろを取り出した。わななく手に紐ひもを解いて、袋から出した仏像を枕元に据えた。二人は右左にぬかずいた。その時齒をくいしばってもこらえられぬ額の痛が、搔かき消すように失せた。掌てのひらで額を撫なでて見れば、創あとは痕もなくなつた。はつと思つて、二人は目を醒ました。

二人の子供は起き直つて夢の話をした。同じ夢を同じ

時に見たのである。安寿は守本尊を取り出して、夢で据えたと同じように、枕元に据えた。二人はそれを伏し拝んで、微かな燈火の明りにすかして、地藏尊の額きずを見た。白毫びやくごうの右左に、鑿たがねで彫ったような十文字の疵きずがあざやかに見えた。

---

二人の子供が話を三郎に立聞たちぎきせられて、その晩恐ろしい夢を見た時から、安寿の様子がひどく変って来た。顔

には引き締まったような表情があつて、眉まゆの根には皺しわが寄り、目は遥はるかに遠い処を見詰めている。そして物を言わない。日の暮に浜から帰ると、これまでは弟の山から帰るのを待ち受けて、長い話をしたのに、今はこんな時にも詞ことばにすくな少すくなにしている。厨子王が心配して、「姉えさんどうしたのです」と云うと、「どうもしないの、大丈夫よ」と云つて、わざとらしく笑う。

安寿の前と変わったのは只これだけで、言う事が間違つてもおらず、為する事も平生へいぜいの通である。しかし厨子王は互に慰めもし、慰められもした一人の姉が、変つた様子

をするのを見て、際限なくつらく思う心を、誰に打ち明けて話すことも出来ない。二人の子供の境界きょうがいは、前より一層寂しくなったのである。

雪が降ったり歇やんだりして、年が暮れ掛かった。奴やつこ

も婢はしためも外に出る為事しごとを止やめて、家の中で働くことになった。安寿は糸を紡つむぐ。厨子王は藁うを擣うつ。藁うを擣うつのは修行はいらぬが、糸を紡ぐのはむずかしい。それを夜になると伊勢の小菘が来て、手伝ったり教えたりする。安寿は弟に対する様子が変わったばかりでなく、小菘に対しても詞少やになつて、動やもすると不愛想をする。しかし

小萩は機嫌を損せず、いたわるようにして付き合っている。

山椒大夫が邸の木戸にも松が立てられた。しかしこの年の始めは何の晴れがましい事もなく、又族うからの女子おなご達は奥深く住んでいて、出入でいりすることが稀まれなので、賑にぎわしい事もない。只上かみも下しもも酒を飲んで、奴の小屋には諍いさかいが起るだけである。常は諍きびをすると、厳きびしく罰せられるのに、こう云う時は奴頭が大目に見る。血を流しても知らぬ顔をしていることがある。どうかすると、殺されたものがあっても構わぬのである。



寂しい三の木戸の小屋へは、折々小萩が遊びに来た。婢の小屋の賑わしさを持って来たかと思うように、小萩が話している間は、陰気な小屋も春めいて、この頃様子の變っている安寿の顔にさえ、めったに見えぬ微笑ほほえみの影が浮ぶ。

三日立つと、又家の中の為事が始まった。安寿は糸を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。もう夜になって小萩が来ても、手伝うに及ばぬ程、安寿は紡錘つむむを廻すことに慣れた。様子は變っていても、こんな静かな、同じ事を繰り返すよ  
うな為事をするには差さしつかえ支なく、又為事が却かえつて一向ひとむきに

なつた心を散らし、落著おちつきを与えるらしく見えた。姉と前のように話をすることの出来ぬ厨子王は、紡いでいる姉に、小萩がいて物を言ってくれるのが、何よりも心強く思われた。

---

水が温ぬるみ、草が萌もえる頃になつた。あすからは外そとの為事が始まると云う日に、二郎が邸を見廻る序ついでに、三の木戸の小屋に来た。「どうじやな。あす為事に出られる

かな。大勢の人の中には病気でうちおるものもある。奴頭やっこがしらの話聞いたばかりではわからぬから、きようは小屋小屋を皆見て廻ったのじゃ」

藁を擣っていた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、この頃の様子にも似ず、安寿が糸を紡ぐ手を止めてや、つと二郎の前に進み出た。「それに就ついて願がごさいます。わたくしは弟と同じ所で為事がいたしとうございます。どうか一しよに山へ遣つて下さるように、お取計らいなすつて下さいまし」蒼ざめた顔に紅くれないが差して、目が赫かがやいている。

厨子王は姉の様子が二度目に変ったらしく見えるのに驚き、又自分になんの相談もせずについて、突然柴荊に往きたいと云うのをも訝いびかしがって、只目を漣みはって姉をまもっている。

二郎は物を言わずに、安寿の様子をじっと見ている。安寿は「外やりにない、只一つのお願でございます、どうぞ山へお遣やりなすつて」と繰り返して言っている。

暫くして二郎は口を開いた。「この邸では奴婢ぬひのなにがしになんの為事をさせると云うことは、重い事にしてあつて、父がみずから極きめる。しかし垣しのぶぐさ衣、お前の願

はよくよく思い込んでの事と見える。わしが受け合って取りなして、きつと山へ往かれるようにして遣る。安心しているが好い。まあ、二人の釋おさないものが無事に冬を過して好かった」こう云って小屋を出た。

厨子王は杵きねを措おいて姉そばの側に寄った。「姉えさん。どうしたのです。それはあなたが一しよに山へ来て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出し抜ぬけに頼んだのです。なぜわたしに相談しません」

姉よろこびの顔は喜よろこびに赫よろこびいている。「ほんにそうお思いのは尤もっともだが、わたしだってあの人の顔を見るまで、頼も

うとは思っていなかったの。ふいと思ひ附いたのだもの」  
「そうですか。変ですなあ」厨子王は珍らしい物を見る  
ように姉の顔を眺ながめている。

奴頭が籠と鎌とを持って這入って来た。「垣衣さん。  
お前に汐汲をよさせて、柴を苅りに遣るのだそうで、わ  
しは道具を持って来た。代りに桶と杓ひやくを貰って往こう」  
「これはどうもお手数てかずでございました」安寿は身軽に立  
って、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取ったが、まだ帰りそうにはしない。  
顔には一種の苦にがわらい笑のような表情が現れている。この男

は山椒大夫一家けのものいいつけの言附を、神の託宣を聴くように聴く。そこで随分情ない、苛酷かこくな事をもためらわずにする。しかし生得しょうとく、人の悶えもだ苦んだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事が穩かに運んで、そんな事を見ずに済めば、その方が勝手である。今の苦笑のよ  
うな表情は人に難儀を掛けずには済まぬとあきらめて、何か言ったり、したりする時に、この男の顔に現れるのである。

奴頭は安寿に向いて云った。「さて今一つ用事があるて。実はお前さんを柴芻に遣る事は、二郎様が大夫様に

申し上げて拵こしらえなさったのじや。するとその座に三郎様がおられて、そんなら垣衣を大童おおわらわにして山へ遣れとおっしゃ仰おっしゃった。大夫様は、好い思附おもいつきじやとお笑なされた。そこでわしはお前さんの髪を貫うて往かねばならぬ」

傍で聞いている厨子王は、この詞ことばを胸を刺されるよ  
うな思をして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安寿の顔からは喜の色が消えなかつた。「ほんにそうじや。柴荊に往くからは、わたしも男じや。どうぞこの鎌で切つて下さいまし」安寿は奴頭の前に項うなじを伸ばした。



光沢つやのある、長い安寿の髪が、鋭い鎌の一搔ひとかきにさつくり切れた。

---

あくる朝、二人の子供は背に籠を負い腰に鎌を挿さして、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の所に来てから、二人一しよに歩くのはこれが始はじめである。

厨子王は姉の心を忖はかり兼ねて、寂しいような、悲しいような思に胸が一ぱいになっている。きのうも奴頭の帰

った跡で、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事かを考えているらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまった。

山の麓に来た時、厨子王はこらえ兼ねて云った。「姉えさん。わたしはこうして久し振で一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはこうして手を引いていながら、あなたの方へ向いて、その禿かぶろになつたお頭つむりを見ることが出来ません。姉えさん。あなたはわたしに隠して、何か考えていますね。なぜそれをわたしに言って聞かせて

くれないのです」

安寿はけさも毫光ごうこうのさすような喜を額に湛たたえて、大きい目を赫かしている。しかし弟の詞には答えない。只引き合っている手に力を入れただけである。

山に登ろうとする所に沼がある。汀みぎわには去年見た時のように、枯葦かれあしが縦横に乱れているが、道端みちばたの草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔ほとりから右に折れて登ると、そこに岩の隙間すきまから清水の湧わく所がある。そこを通り過ぎて、岩壁いわかべを右に見つつ、うねった道を登って行くのである。

丁度岩の面おもてに朝日が一面に差している。安寿は畳かさなり合った岩の、風化した間に根を卸して、小さい堇すみれの咲いているのを見附けた。そしてそれを指さして厨子王に見せて云った。「御覧。もう春になるのね」

厨子王は黙って頷いた。姉は胸に秘密を蓄え、弟は憂うれえばかりを抱いだいているので、とかく受応うけこたえが出来ずに、話  
は水が砂に沁しみ込むようにとぎれてしまう。

去年柴を茹ほった木立の辺ほとりに来たので、厨子王は足を駐とどめた。「ねえさん。ここらで茹ほるのです」

「まあ、もっと高い所へ登って見ましようね」安寿は先

に立ってずんずん登って行く。厨子王は訝いぶかりながら附いたいて行く。暫くして雑木林よりは余程高い、外山とやまの頂いただきとも云うべき所に来た。

安寿はそこに立って、南の方をじつと見ている。目は、石浦を経て由良ゆらの港みなとに注ぐ大雲川おおくもがわの上流を辿たどって、一里ばかり隔った川かわむかい向むかいに、こんもりと茂った木立の中から、塔たきの尖さきの見える中山なかつまに止まった。そして「厨子王や」と弟を呼び掛けた。「わたしが久しい前から考かんがえごと事ことをしていて、お前ともいつもの様に話をしないのを、変だと思っおもっていたでしょうね。もうきようは柴なんぞは苳ぢらなく

ても好いいから、わたしの言う事を好くお聞きこ。小菥は伊勢から売られて来たので、故郷からこの土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむずかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。お母あ様と御一しよに岩代を出てから、わたし共は恐ろしい人にばかり出逢ったが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢わぬにも限りません。お前はこれから思い切つて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登っておくれ。神かみ仏ほとけのお導みちびきで、善い

人にさえ出逢ったら、筑紫へお下りになったお父う様のお身の上も知れよう。佐渡へお母あ様のお迎に往くことも出来よう。籠や鎌は棄てて置いて、汀子かれいけだけ持って往くのだよ」

厨子王は黙って聞いていたが、涙が頬ほおを伝って流れて来た。「そして、姉えさん、あなたはどうぞしようと云うのです」

「わたしの事は構わないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積つもりでしておくれ。お父う様にもお目に掛かり、お母あ様をも島からお連申つれした上で、わたし

をたすけに来ておくれ」

「でもわたしがいなくなったら、あなたをひどい目に逢わせましょう」厨子王が心には烙印やきいんをせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それは意地いじめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買った婢はしためを、あの人は殺しはしません。多分お前がいなくなったら、わたしを二人前働かせようとするでしょう。お前の教えてくれた木立の所で、わたしは柴を沢山苳ります。六苳までは苳れないでも、四苳でも五苳でも苳りましょう。さあ、あそこまで降り



て行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう」こう云つて安寿は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思い定め兼ねて、ぼんやりして附いて降りる。姉は今年十五になり、弟は十三になっているが、女は早くおとなびて、その上物に憑つかれたように、聡さとく賢さかしくなっているので、厨子王は姉の詞ことばに背そむくことが出来ぬのである。

木立の所まで降りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、こん度逢うまでお前に預けま

す。この地藏様をわたしだと思つて、まもりがたな護刀と一しよに  
して、大事に持つていておくれ」

「でも姉えさんにお守がなくては」

「いいえ。わたしよりはあぶない目に逢うお前にお守を  
預けます。晩にお前が帰らないと、きつと討手うってが掛かり  
ます。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、  
追い附かれるに極まっています。さつき見た川の上手を  
和江わえと云う所まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、  
向河岸むこうがしへ越してしまえば、中山までもう近い。そこへ往  
つたら、あの塔の見えていたお寺に這入つて隠しておも

らい。暫くあそこに隠れていて、討手が帰って来た跡で、寺を逃げてお出いで」

「でもお寺の坊さんが隠して置いてくれるでしょうか」

「さあ、それが運うんだめ験しだよ。開ける運なら坊さんがお前を隠してくれましょう」

「そうですね。姉えさんのきおっしよう仰やる事は、まるで神様が仏様が仰やるようです。わたしは考を極めました。なんでも姉えさんの仰やる通にします」

「おう、好く聴いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれます」

「そうです。わたしにもそうらしく思われて来ました。逃げて都へも往かれます。お父う様やお母あ様にも逢われます。姉えさんのお迎にも来られます」厨子王の目が姉と同じ様に赫かがやいて来た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出いで」

二人は急いで山を降りた。足の運はこびも前とは違って、姉の熱した心持が、暗示あんしのように弟に移って行ったかと思われる。

泉の湧く所へ来た。姉は汀子かれいけに添えてある木の椀まりを出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出かどでを祝うお酒だ

よ」こう云つて一口飲んで弟に差した。

弟は椀を飲み干した。「そんなら姉えさん、御機嫌好  
う。きつと人に見附からずに、中山まで参ります」

厨子王は十歩ばかり残っていた坂道を、一走りに駆け  
降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上  
手へ向かつて急ぐのである。

安寿は泉の畔ほとりに立って、並木の松に隠れては又現れ  
る後影を小さくなるまで見送った。そして日は漸ようやく午  
に近づくのに、山に登ろうともしない。幸にきようはこ  
の方角の山で木を樵こる人がないと見えて、坂道に立って

時を過す安寿を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾った。それは安寿の履であつた。

中山の国分寺の三門に、松明の火影が乱れて、大勢の人が籠み入って来る。先に立ったのは、白柄の薙刀を手挾んだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立って大声に云った。「これへ参ったのは、石浦の山椒大夫が族うからのものじゃ。大夫が使う奴やつこの一人が、この山に逃げ込んだのを、慥たしかに認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐにここへ出して貰おう」附いて来た大勢が、「さあ、出して貰おう、出して貰おう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、広い石畳が続いている。その石の上には、今手に手に松明を持った、三郎が手のものが押し合っている。又石畳の両側には、境内けいだいに住んでいる限かぎりの僧俗が、殆ど一人も残らず簇むらっている。こ

れは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも、庫裡くらからも、何事が起ったかと、怪んで出て来たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫あんだ時、開けて入れたら、乱暴をせられはすまいかと心配して、開けまいとした僧侶そうりよが多かった。それを住持曇どんみ猛まうりっし律師が開けさせた。しかし今三郎が大声で、逃げた奴を出せと云うのに、本堂は戸を閉じたまま、暫くの間ひっそりとしている。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手のものの中から「和尚おしょうさん、どうしたのだ」と呼ぶものが



ある。それに短い笑わらいごえ声こゑが交る。

ようようの事で本堂の戸が静かに開あいた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏へん衫さん一つ身に纏まとって、なんの威儀をも繕わず、常燈明の薄うす明あかりを背にして本堂の階はしの上に立たった。丈たけの高い巖がん畳じような体と、眉のまだ黒い廉張かどばった顔とが、揺ゆらめく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐しずかに口を開いた。騒がしい討手すみずみのものも、律師の姿を見ただけで黙ったので、声は隅々すみずみまで聞えた。

「逃にげた下人げにんを捜しに来られたのじやな。当山では住持

のわしに言わずに人は留めぬ。わしが知らぬから、その  
 ものは当山にいぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟けんげきを執  
 って、多人数たにんず押し寄せて参られ、三門を開けと云われた。  
 さては国に大乱でも起ったか、公おおやけの叛逆人はんぎやくにんでも出来  
 たかと思つて、三門を開けさせた。それになんじや。御身おんみ  
 が家の下人の詮議せんぎか。当山は勅願の寺院で、三門には勅  
 額を懸け、七重の塔には宸翰しんかん金字こんじの経文が蔵おさめてある。  
 ここで狼藉ろうぜきを働かれると、国守くにのかみは検校けんぎょうの責せめを問われる  
 のじや。又総本山東大寺に訴えたら、都からどのような  
 御沙汰ごさたがあるかも知れぬ。そこを好う思つて見て、早う

引き取られたが好かろう。悪い事は言わぬ。お身達のた  
めじゃ」こう云って律師は徐かに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨にらんで齒咬はがみをした。しかし戸を打ち  
破って踏み込むだけの勇氣もなかった。手のもの共は只  
風に木葉のざわつくように囁ささやきかわしている。

この時大声で叫ぶものがあつた。「その逃げたと云う  
のは十二三の小わっぱじゃろう。それならわしが知つて  
おる」

三郎は驚いて声の主ぬしを見た。父の山椒大夫に見まがう  
ような親爺おやじで、この寺の鐘楼守しゆろうもりである。親爺は詞ことばを続つ

いで云った。「そのわっぱはな、わしが午頃鐘楼から見  
ておると、築泥ついでじの外を通って南へ急いだ。かよわい代かわり  
には身が軽い。もう大分だいぶんの道を行つたじやろ」  
「それじや。半日に童わらべの行く道は知れたものじや。続  
け」と云つて三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、  
鐘楼守は鐘楼から見て、大声で笑つた。近い木立の中で、  
ようよう落ち著いて寝ようとした鴉からすが二三羽又驚いて  
飛び立った。

あくる日に国分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安寿の入水じゆすいの事を聞いて来た。南の方へ往つたものは、三郎の率いた討手たなべが田辺まで往つて引き返した事を聞いて来た。

中二日置いて、曇猛律師が田辺の方へ向いて寺を出た。盥たらひほどある鉄の受糧器を持って、腕の太さの錫杖しゃくじょうを衝ついている。跡からは頭を剃そりこくつて三衣さんえを着た厨子王が附いて行く。

二人は真昼に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊った。  
 やましろ しゅじやくの 山城の朱雀野に来て、律師は権現堂 ごんげんどう に休んで、厨子王に  
 別れた。「守本尊を大切に<sup>くびす</sup>して往け、父母 ふぼ の消息はきつ  
 と知れる」と言い聞かせて、律師は踵 めぐら を旋した。亡く  
 なった姉と同じ事を言う坊様だと、厨子王は思った。

都に上った厨子王は、僧形 そうぎよう になっているので、東山  
きよみずでら の清水寺に泊った。

こもりどう 籠堂に寝て、あくる朝目が醒めると、直衣 のうし に烏帽子 えぼし  
 を着て指貫 さしぬき を穿 は いた老人が、枕元に立っていて云った。  
 「お前は誰 たれ の子じや。何か大切な物を持っているなら、

どうぞ己おれに見せてくれい。己は娘の病気の平癒へいゆを祈るた  
 めに、ゆうべここに参籠さんろうした。すると夢にお告つげがあつた。  
 左の格子こうしに寝ている童わらわが好い守本尊を持つてゐる。そ  
 れを借りて拝ませいと云う事じゃ。けさ左の格子に来て  
 見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして、守  
 本尊を貸してくれい。己は関白師実もろざねじゃ」  
 厨子王は云つた。「わたくしは陸奥椽正むつのじょうまささうじ氏と云うもの  
 の子でございます。父は十二年前に筑紫の安楽寺へ往つ  
 たきり、歸らぬそうでございます。母はその年に生れた  
 わたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡しのぶごおりに

住むことになりました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ売られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つてゐる守本尊はこの地藏様でございます」こう云つて守本尊を出して見せた。

師実は仏像を手に取つて、先まず額に当てるようにして礼をした。それから面背めんばいを打ち返し打ち返し、丁寧に見て云つた。「これは兼ねて聞き及んだ、尊ほんい放光王地藏ほうこうおうじぞう



菩薩ぼさつの金像こんぞうじや。百濟国くだらのくにから渡つたのを、高見王が持仏  
 にしてお出いでなされた。これを持ち伝えておるからは、お  
 前の家柄えいほうに紛まれはない。仙洞せんとうがまだ御位みくらいにおらせられた  
 永保えいほうの初はつに、国守こくしゅの違格いきやくに連座して、筑紫へ左遷させんせられ  
 た平正たいらのまさうじ氏が嫡子ちやくしに相違さうゐあるまい。若もし還俗げんぞくの望のぞみがあ  
 るなら、追つては受領ずりようの御沙汰ごさたもあるう。先ず当分は己  
 の家の客にする。己と一しよに館やかたへ来い」

関白師実の娘と云ったのは、仙洞に傳かしずいで、実は妻の姪めいである。この后きやくきは久しい間病気でいられたのに、厨子王の守本尊を借りて拝むと、すぐに拭ぬぐうように本復ほんぶくせられた。

師実は厨子王に還俗させて、自分で冠かんむりを加えた。同時に正氏が謫所たくしよへ、赦免状を持たせて、安否を問いに使用を遣った。しかしこの使が往った時、正氏はもう死んでいた。元服して正道と名告なっている厨子王は、身の窶やつれる程歎いた。

その年の秋の除日じもくに正道は丹後の国守にせられた。こ

れは遥授ようじゆの官で、任国には自分で往かずに、椽じようを置まいて治めさせるのである。しかし国守は最初の政まつりごととして、丹後一国で人の売買うりかいを禁じた。そこで山椒大夫も悉ことごとく奴婢を解放して、給料を払うことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のように思ったが、この時から農作も工匠たくみの業わざも前に増して盛になって、一族はいよいよ富み栄えた。国守の恩人曇猛律師は僧都そうずにせられ、国守の姉をいたわった小菘は故郷へ還された。安寿が亡き迹あとは懇ねんごろに弔とむらわれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つことになった。

正道は任国のためにこれだけの事をして置いて、特に  
仮寧けにようを申し請うて、微行して佐渡へ渡った。

佐渡の国府こふは雑太さわたと云う所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で国中を調べて貰ったが、母の行方ゆくえは容易に知れなかった。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道に掛かった。空は好く晴れて日があかあかと照っている。正道は心の中に、「どうしてお母あ様の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに任せて調べさせ

て、自分が捜し歩かぬのを神仏かみほとけが憎んで逢わせて下さらないのではあるまいか」などと思いながら歩いている。ふと見れば、だいぶ大きい百姓家がある。家の南側の疎まばらな生垣いけがきの内が、土を敲たたき固めた広場になっていて、その上に一面に蓆むしろが敷いてある。蓆には刈り取った粟あわの穂が干してある。その真ん中に、襪ば襪らを着た女がすわって、手に長い竿さおを持って、雀すずめの来て啄ついばむのを逐おっている。女は何やら歌のような調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、この女に心が牽ひかれて、立ち止とまって覗のぞいた。女の乱れた髪は塵ちりに塗まみれている。顔を見

れば盲めしいである。正道はひどく哀れに思った。そのうち女のつぶやいている詞ことばが、次第に耳に慣れて聞き分けられて来た。それと同時に正道は瘡病おこりやみのように身内が震ふるって、目には涙が湧いて来た。女はこう云う詞を繰り返してつぶやいていたのである。

安寿恋しや、ほうやれほ。

厨子王恋しや、ほうやれほ。

鳥しやうも生あるものなれば、

疾とう疾う逃げよ、逐わずとも。

正道はうっとりとなつて、この詞に聞き惚ほれた。その

うち臟腑ぞうふが幹にえ返るようになって、獸けものめいた叫さけびが口から出ようとするとするのを、齒を食いしばってこらえた。忽たちまち正道は縛られた縄が解けたように垣の内へ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつつ、女の前に俯伏うつふした。右の手には守本尊を捧げ持って、俯伏した時に、それを額に押し当てていた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに来たのを知った。そしていつもの詞を唱え罷やめて、見えぬ目でじつと前を見た。その時干した貝が水にほとびるように、両方の目に潤いが出た。女は目が開あいた。

「厨子王」と云う叫が女の口から出た。二人はびったり抱き合った。







日本文学電子図書館

---

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

---



日本文学電子図書館